

國學院大學栃木短期大学
日本文化研究 第5号 抜刷
令和三年二月二十八日 発行

〈學術論文〉

『魚類扣』考

—精進魚類物における位置付けを中心に—

伊藤 慎吾

〈学術論文〉

『魚類扣』考

— 精進魚類物における位置付けを中心に —

伊藤 慎 吾

はじめに

異類合戦物の主要な対立軸に〈魚類×精進物〉がある。これは中世後期から行われてきたもので、『精進魚類物語』はその嚆矢として名高い。その後、近世から近代にかけて、このテーマは草双紙や講釈、歌謡、浮世絵などに展開していった。パフォーマンスとしては〈読み〉や〈語り〉にとどまるものと思われたが、

最近、謡曲風の詞章が複数創作されていたことが資料から確認できた。謡曲風ということもさることながら、中世後期の『精進魚類物語』と本文的に関連性が見出される。そこで、今回はその資料の紹介と、精進魚類物の系譜における位置付けを試みたい。

1 書誌と本文

まず、『魚類扣』と題する新出資料の書誌的な解説から始めよう。書誌的な事項を簡単に記すと次のようになる。



書型 長帳綴(仮綴)一冊。

料紙 楮紙

表紙 なし

内題 魚類扣

丁数 五丁

行数 一三〇一六行(不規則)

本文 漢字仮名交じり文

奥書 なし

印記 なし

所蔵者 伊藤慎吾

「魚類扣」は一丁オモテから四丁オモテ一五行目まで、それ以降、「小鳥揃」「祝井揃」が付いている。すべて同筆である。なお、「祝井揃」は完結していない。書名は「魚類扣」とあるが、一般的に見るならば、これは「魚類揃」とありたいところである。異類合戦物で「〇〇揃」と題するものは散見されるが、「〇〇扣」とするものは寡聞にして知らない。誤記を疑いたいところである。この点、後考に譲る。

2 本文

次に本文は、本稿末尾に全文を掲げておく。梗概は次のようにまとめられる。

魚類元年八月十五夜、魚類方の大将、鯛の將軍 かね高が精進方を邪魔に思い、天下（＝境内）を取ろうと企て、戸棚が城に諸国の魚類を招集し、さらに貝類も味方に加わる。

これを聞いた精進方の大将はまれの將軍納豆は家来を味噌樽が城に招集し、戸棚が城に押し寄せ、合戦が始まる。

この事態に御膳廻りの塩焼の太郎、朝倉の山椒、奈良の諸白が仲裁者となり、和談に及ぶ。その様に皆感じ入った。

結末に、和談ののち「六腹指でぞ引たり」とあるが、これは六波羅に引く平家の軍勢に由来する表現であるから、『平家物語』の影響を臆気ながら感じさせる結末となっている。また、仲裁に入るのが塩焼・山椒・諸白というのは、精進料理・魚料理両方に相性の良い

ものだからであろう。

このように魚類と精進物（野菜及びその加工品）とが合戦する物語である。『精進魚類物語』以来、近代に至るまで何編かの精進魚類の合戦物が作られたが、これもその一種といえることができる。しかし特筆すべきは本文の随所に「シテ」や「ツレ」といった謡曲特融の記号が付されていることである。異類合戦物は、管見では一三〇種あまり見出しているが、その中でも謡曲仕立てになっているものは極めて稀である。現在知られているところでは、寛文八年に京都で刊行された『軍舞』収録の三種のうち、二種以外に確認できない。

3 諸本との関係

ストーリー

『魚類扣』と同一作品と捉えられるものとして、『軍舞』所収の「うおがせん并しやうじんもの」と『魚類精進合戦』とを挙げることができる。

まず『軍舞』は「とりけだ物まひ」「むしまひ」「うおがせん并しやうじんもの」の三種の短編物語を収録する。本作品は寛文八年（一六六八）二月に山本九兵

衛によって刊行された（刊記）。現存本は一点確認されるだけの稀観本である（松坂市射和文庫所蔵）。¹⁾小間物商帯屋次郎吉が亡き子長九郎の供養のために射和寺（麿寺）に寄進した地藏菩薩坐像の胎内に収められていたものである。山本九兵衛は名のある書肆なので、寛文延宝期の書籍目録をはじめ、記録類に見出すことができる。

さて『軍舞』のうち、「とりけだ物まひ」と「うおがせん并しやうじんもの」（以下、「魚合戦」と略す）は謡本のようにシテ・ツレ・ワキ等、台詞の担当が指示されている。この点、異類合戦物としては稀有な特色がある。その「魚合戦」の詞章が『魚類扣』に近似するのである。まず、その梗概を述べれば以下の通りである。

魚類元年八月十五日、魚類方の大将、鮭の將軍ながひれが精進方を邪魔に思い、天下（＝台所）を取ろうと企て、戸棚が城に諸国の魚類を招集し、さらに貝類も味方に加わる。

これを聞いた精進方の大将浜名の將軍納豆殿は

家来を味噌桶が城に招集し、戸棚が城に押し寄せ、合戦が始まる。

精進魚類双方の奮戦に、皆、感じ入った。

右の梗概からわかることは、「魚合戦」と『魚類扣』とは異文を含むものの、同一作品として一括することができるということである。要するに異本関係にあるといえよう。

次に『魚類精進合戦』（以下、『合戦』と略す）について見てみよう。

精進元年八月十五夜稲田の年、魚類方の大将、鮭の將軍長鱈が精進方を邪魔に思い、天下（＝台所）を取ろうと企て、戸棚が城に諸国の魚類を招集し、さらに貝類も味方に加わる。

これを聞いた精進方の大将酒菜將軍納豆公は家来を味噌桶が城に招集し、戸棚が城に押し寄せ、合戦が始まる。

精進魚類入り乱れ、鍋の城に火の手が上がる。皆、その味に舌打ちし、酒を飲んだ。

本書は「寛政七年七月乙卯歳」という書写奥書をもつものである。所蔵者の塩川和宏氏が「資料紹介・架蔵『魚類精進合戦』」と題して報告したことがある。本稿ではその際に配布された資料（翻刻・影印も掲載）をもとに取り上げる。

『合戦』の梗概からも、物語の大枠は共通するが、一部のモチーフに異同が見られることから、やはり『魚類扣』とは異本関係にあると捉えることができる。『魚類扣』の「魚類元年八月十五夜」という時間設定は、「魚合戦」では「十五日」という日夜の違い、『合戦』では「精進元年」という元号の違いがある。

また魚類方の大将は「魚合戦」と『合戦』が鮭將軍長鱈であるのに対し、『魚類扣』は鯛の將軍かね高である。「魚合戦」「合戦」両書にも鯛は出てくるが、ともに鯛赤助とある。鮭將軍長鱈を大将とし、その子鯛太郎粒実・次郎鯉吉兄弟を伺候させる設定や鯛赤助が登場するのは『精進魚類物語』を引き継いだものである。一方、『魚類扣』に見える鯛の將軍かね高が何に由来するのか不明である。時代が下るが江戸後期の『精進魚類問答』（写一冊）³⁾には魚類方の大将を鯛魚將軍

金高としており、明らかに関係性をもつといえる。ただ、『精進魚類問答』とは内容やその他の擬人名に共通点はないことから、何か共通する材料が他にあったと想定したほうがいいかと思われる。

また、舞台となるのが『魚類扣』では境内、「魚合戦」『合戦』では台所であり、結末が『魚類扣』では和談、他二書では合戦状態のままである。

これらの点から、「魚合戦」と『合戦』とは近く、『魚類扣』はやや遠い位置にあるものと捉えられるだろう。

魚類精進合戦		備考
鯨冠者		『精進魚類物語』鯨冠者
桂ヲ川左衛門鮎之助	山城国	『精進魚類物語』鮎入道（寛永版）
鯨鯨ノ庄司馬鹿助	山城国	『精進魚類物語』鮎ノ大介
鯛ノ一黨鯉（ゴミ）之助	松浦方	
鯉（ウナギ）ノ判官長祐	山城国	
鯛之助	信濃国	
（王餘魚）	伊勢国	『精進魚類物語』王余魚中務
鯨ノ大助		『精進魚類物語』鯨ノ大海ノ亮
源五郎鮎家骨高	近江国	『精進魚類物語』小鮎近江守
鯛之助	伊勢国	『精進魚類物語』[魚臣] 尉
鮎ノ將軍長鱈		『精進魚類物語』鮎大助長[魚父]
鯉三郎重家	紀州熊野	『精進魚類物語』鯉三郎
鯛ノ赤助		『精進魚類物語』鯛ノ赤助鯨吉
鯉ノ入道短氣坊		『精進魚類物語』鯉入道
鯉ノ法師鯉之助	信濃国	『精進魚類物語』（土長）
生海鼠ノ庄司彼而令（カレノ）助	山城国	『精進魚類物語』鯉崎次郎
鯛ノ太郎粒実		『精進魚類物語』鯉ノ長介
次男鬚義		『精進魚類物語』鯛太郎粒実
鯉ノ相伴毒助	山城国	『精進魚類物語』次郎鯉吉
鯛判官	丹後国	『精進魚類物語』鯛ノ大隅（守）
淀鯉太郎鱈房	山城国	
青菜ノ三郎	近江国	『精進魚類物語』青莖三郎常吉
青豆三郎四郎		
西山ノ蕪	執検（権）	
畠山庄司黒豆		『精進魚類物語』に畠山翰豆
東山ノ心太	執検（権）	
蒟蒻の震ひ物（助ノ誤カ）	山城国	『精進魚類物語』蒟蒻兵衛群吉
大角豆四郎		『精進魚類物語』大角豆角戸三郎
豆腐ノ冠者豆口		『精進魚類物語』こたうふの権介
酒菜將軍納豆公		「れ」は「な（那）」の誤カ
蒜之助	山城国	
人參の奇異之助	山城国	
藪ミ太郎	山城国	『精進魚類物語』土[木棘] 兵衛尉
麩の源助	山城国	

擬人名
次に、登場するキャラクターのネーミングを見てみよう（表参照）。

		魚類扣		うおがせん井しやうじんもの	
				魚類	
4	アカラ			あからのくわんじや	
	アジ	2オ2	鯉の冠者		
3	アユ	1ウ6	桂川の左衛門鮎之丞	あいの四郎	近江国
4	アンコウ			あんがうの太郎はかすけ	近江国
	イシモチ			いしもちの二郎	近江国
1	イワシ	2オ5	鯉の一党ごまめ之助	いわじの一とうこまのすけ	松浦方
1	ウナギ	1ウ11	鱧の判官ながすけ	うなぎの左衛門長介	近江国
	カジカ				
	カツオ			かつうをの左衛門	山城国
	カレイ	2オ7	王餘魚の平助	かれいのぢやう	伊勢国
1	クジラ	2オ1	鯨の大助	くぢらの大すけ	
1	ゲンゴロウブナ	1ウ8	源五郎鮎いへ	源五郎ふない丞	近江国
	コイ			こいのぜう	山城国
	コチ	2オ7	鯉之丞	こちの平助	伊勢国
	コロダイ	1オ6	ころ鯛の三郎やすとき		
4	サケ			さけのしやうぐんながひれ	
	サワラ			さわらの十郎ほそづら	近江国
1	スズキ	2オ5	鱸の三郎	すずきの三郎	紀州熊野
4	タイ	1オ3	鯛の將軍かね高	たいのあかすけ	
1	タコ	1ウ10	蛸の入道だんぎ坊	たこの入道だんぎぼう	法師武者
	チヌダイ	1オ5	ちぬ鯛の次郎やすかね		
1	ドジョウ	1ウ12	鯉のほうしごみ之助	どじやうのほつしみちのすけ	法師武者
	ナマコ	1ウ8	生海鼠の次郎はり助		
	ナマズ	1ウ9	鯉の庄司髪なが		
	ハモ	2オ1	鱧のたけ長		
4	ハララゴ			ははらごの太郎つぶざね	
4	ヒズ			二郎ひつよし	
4	フグ			ふくのちやうはんどくすけ	近江国
1	ブリ	2オ3	鯉の判官	ふりのはんぐわん	丹後国
1	ヨドゴイ	1ウ7	淀鯉の太郎ひれふさ	よどごいの太郎ひれふさ	山城国
				精進	
3	アオナ	3オ7	青菜の三郎	(あをなの一そく)	近江国
1	アオマメ	3オ1	青豆の三郎四郎	あをまめの三郎四郎	
	ウド	3オ7	獨活の大木		
1	クロマメ	2ウ12	畠山の九郎豆	さたけ山しやうしくろまめ	
	ココロプト			(こころぶと)	
2	コンニャク	3オ9	蒟(蒟)のふるひ左衛門	こんにやくふるひ丞もん	
3	ササゲ	2ウ13	大角豆の三郎	(さゝげ)	
3	トウフ	3オ8	豆腐の冠者		
1	ナットウ	2ウ9	はまれの將軍納豆	はまなのしやうぐんなつとうどの	
	ニク				
	ニンジン				
1	ハジカミ	3ウ14	はちかみの太郎	はちかみ太郎	山城国
3	フ	3オ9	麩の源太		
				御前廻	
	サンショウ	4オ4	朝倉の山舩		
	シオヤキ	4オ4	塩焼の太郎		
	モロハク	4オ4	奈良の諸白		

この表では三つの伝本に見られる擬人名を抽出した。魚類・精進・その他を五十音順に並べている。『魚類扣』は記載される丁数と行数を示したので、本稿末尾の翻刻で該当箇所を確認できる。「備考」欄には三本の共通祖本の素材となった『精進魚類物語』における擬人名を特に掲げている。

さて、冒頭に1〜4の数字を付した項目がある。これは全一致であれ、部分一致であれ、三本に見える名の異同を示したものである。整理すると次のようになる。

1 『魚類扣』『魚合戦』『合戦』に共通する名

イワシ 鰯の一党ごまめ之助／いわじの一同ごまのすけ／鰯ノ一黨鱚之助

ウナギ 鱷の判官ながすけ／うなぎの左衛門長介／鱷ノ判官長祐

クジラ 鯨の大助／くぢらの大すけ／鯨ノ大助

ゲンゴロウブナ 源五郎鮒いへ／源五郎ふないゑ／

源五郎鮒家骨高

スズキ 鱸の三郎／すずきの三郎／鱸三郎重家Ⅱ

『精進魚類物語』鱸三郎

タコ 蛸の入道だんぎ坊／たこの入道だんぎぼう／蛸ノ入道短気坊Ⅱ『精進魚類物語』蛸入道

ドジョウ 鯿のほうしごみ之助／どじやうのほつし

みちのすけ／鯿ノ法師鱚之助

ブリ 鰯の判官／ふりのはんぐわん／鰯判官

ヨドゴイ 淀鯉の太郎ひれふさ／よどごいの太郎ひ

れふさ／淀鯉太郎鱈房

アオマメ 青豆の三郎四郎／あをまめの三郎四郎／

青豆三郎四郎

クロマメ 畠山の九郎豆／さたけ山しやうしくろま

め／畠山庄司黒豆

ナットウ はまれの將軍納豆／はまなのしやうぐん

なつとうどの／酒菜將軍納豆公

ハジカミ はぢかみの太郎／はぢかみ太郎／薑ミ太

郎

2 『魚類扣』『魚合戦』に共通する名

コンニヤク 蒟〔蒟^{（蒟カ）}〕のふるひ左衛門／こんにやく

ふるひゑもん

3 『魚類扣』『合戦』に共通する名

アユ 桂川の左衛門鮎之丞／桂ラ川左衛門鮎之助

アオナ 青菜の三郎／青菜ノ三郎Ⅱ『精進魚類物語』
青蔓三郎常吉

ササゲ 大角豆の三郎／大角豆四郎Ⅱ『精進魚類物語』
大角豆角戸三郎

トウフ 豆腐の冠者／豆腐ノ冠者豆口

フ 麩の源太／麩の源助

4 「魚合戦」「合戦」に共通する名

アカラ あからのくわんじや／鯢冠者Ⅱ『精進魚類物語』鯢冠者

アンコウ あんがうの太郎はかすけ／鯨ノ庄司馬
鹿助

サケ さけのしやうぐんがひれ／鮭ノ將軍長鯨Ⅱ

『精進魚類物語』鮭大助長「魚父」

タイ たいのあかすけ／鯛ノ赤助Ⅱ『精進魚類物語』

鯛ノ赤助鯨吉

ハララゴ ははらごの太郎つぶざね／鯛ノ太郎粒実

Ⅱ『精進魚類物語』鯛太郎粒実

ヒズ 二郎ひつよし／次男鬚義Ⅱ『精進魚類物語』

次郎鯨吉

フグ ふくのちやうはんどくすけ／鰻ノ相伴毒助

ここからは、三本に共通する擬人名が多く見られることが知られる。そして、『合戦』が『魚類扣』と同様に「魚合戦」にも共通する擬人名が散見されるのに対し、『魚類扣』と「魚合戦」の関係が希薄であることを読み取ることができらるだろう。

系統付け

次に三本の関係性について検討しよう。

塩川和宏氏は、「魚合戦」と『合戦』との関係について「『魚類精進合戦』は、『精進魚類物語』の流れを汲む作品で、『軍舞』「うおがせん并しやうじんもの」に、『精進魚類物語』の記述などを参照しつつ成立したものと考えられる」と推測されている。つまり『合戦』は「『精進魚類物語』の影響下に成った「魚合戦」に再度「精進魚類物語」を合成して成ったものだという見解のようである。

まず前提として、『精進魚類物語』から「魚合戦」が派生的に作られたことは動かないであろう。問題は「魚合戦」が先行し、『合戦』が後に続くのかどうかという点である。「魚合戦」をもととして、『精進魚類物

語』を参照しながら新たなテキストを作るという状況にいささか不自然さを感じるのである。これを参照したという根拠に『合戦』には『物語』と共通するものが登場するからだという。しかし、「魚合戦」に見えず、『合戦』に見える事例はアオナとササゲ（ただし『物語』では大角豆角戸三郎であるのに対して、『合戦』では大角豆四郎）だけである。その他のアカラ・サケ・スズキ・タイ・タコ・ハララゴ・ヒズは両本に見られる。そうすると、擬人名に限って言えば、『物語』を参照してアオナとササゲの名のみを変更したということになる。そうであるならば、「魚合戦」「合戦」の共通祖本を想定し、その段階で『物語』の擬人名を受け継いだものの、両本の本文が分岐するに至り、「魚合戦」系統の本文からはアオナとササゲの名が省略されたと推測したほうが自然のように思われる。

ここに『扣』を加えてみなくてはならない。ストーリー展開からすると、「魚合戦」と『合戦』が合戦をした状態で結末を迎えるのに対して、『扣』は和談に及ぶかたちを採っている。ゆえに二本と距離があるようであるが、しかし固有名詞や微細な表現の差異とい

う点ではむしろ『扣』と『合戦』の関係のほうが近い。たとえばウナギは「魚合戦」が「左衛門長介」であるのに対し二本は「判官ながすけ」であり、ドジョウは「魚合戦」が「みちのすけ」であるのに対し、二本は「ごみのすけ」である。

本文の正誤に目を向けると、次の一節が注意される。

「魚合戦」

御まへをき^a一ぞくに^b。さたけ山しやうしくろまめ。

あつきさ、げ^b。としつもつて十六才。あをまめの

三郎四郎^cあをばたきどかたく。とぢまめやが

て。ごうんをひらきまめ。

『合戦』

先一番^b。畠山^b庄司黒豆大角豆四郎年積て十六才青

豆三郎四郎^c青簇颯ツて押立て門木戸堅^c閉豆の頓

而御運^c開き豆

『魚類扣』

御前近き^a一属に畠山^bの九郎豆大角豆の三郎年積て

十八才青豆の三郎四郎^c青旗指て御前にこそは詰ら

る、^{シテ}門木戸堅くとじ豆^{ワキ}頓而御運はひらき豆

まず「魚合戦」の a 「をき」をそのまま読むと、文意が通じない。『扣』ではここを「近き」と記している。つまり將軍の御前近き武將に畠山九郎豆や大角豆三郎がいると述べているのだ。してみると、「魚合戦」の「を」は「近」の誤写と解することができる。つまり親本に「近」とあるのを「越」を母字とする仮名「を」と誤認したのであろう。

『合戦』では b の擬人名を「畠山庄司黒豆」としている。これは「畠山庄司」すなわち畠山庄司重忠の洒落だ。『魚類扣』の「畠山の九郎豆」では「畠山九郎」という人名を掛けることになる。歴史的にはその名を用いた人物はいるが（たとえば永禄八年の將軍義輝暗殺時に死んだ畠山九郎）、『平家物語』や能・浄瑠璃などで知られる人物でなければ洒落が効いていない。そして「魚合戦」に「さたけ山」とあるのは「はたけ山」の誤りであることは明らかだろう。

青豆三郎四郎に続く傍線部 c について見ると、まず「魚合戦」では文意が通じない。「青旗木戸堅く閉じ豆」と解釈できるだろう。「木戸固く閉じ」に「閉じ豆」を掛けてあるので、その点は問題ない。では「青

旗」はどうかといえ、掛かるところがないのである。これに対して『合戦』では「青旗颯つて押し立て、門木戸堅く閉じ豆の」となるから、青旗を押し立て、門木戸を閉じると、問題なく意味が取れる。この点、『魚類扣』も青旗・門木戸が同様に処理されている。つまり「魚合戦」の文は欠落部分があり、それを『合戦』『魚類扣』で補完することができるということだ。

さらに文脈的判断を広げてみるならば、『合戦』では、畠山庄司黒豆・大角豆四郎・青豆三郎四郎が青旗を押し立て、門木戸堅く閉じたと解釈できる。ただ、ここは酒菜將軍納豆公が御前に召集したので、「先づ一番に」この三名が参上したという文脈である。それを踏まえた上で城の状況として、旗を立て、門木戸を閉じるといふ展開に移るのだから、『合戦』の文には飛躍がある。それに対して『魚類扣』は將軍が召集をかけるからの記述である。將軍納豆の御前近い一族である畠山九郎豆・大角豆三郎・青豆三郎四郎が青旗を指して御前に詰めた。そして場面が將軍の御前から城の状況に転じ、門木戸を堅く閉じるといふ流れとなる。『合戦』では青旗が何を意味するのか判然としないが、『魚

類扣』では甲冑姿で馳せ参じた九郎豆ら三名が指物として青旗を装着した状態であることを述べていることが分かる。さらに、「御前にこそは詰らるゝ」で一文が終わり、続く「門木戸」からは、

門木戸堅く⁷とじ豆の⁵ 頓而御運は⁷ ひらき豆⁵
鬼をあざむく⁷ 節分の⁵

と、七五調の節が付いている。これに対して「魚合戦』及び「合戦』は、

木戸堅く⁷とぢ豆⁴ やがて⁷ 御運を⁵ ひらき豆⁵
虚空を走る⁷ 空豆⁴ 鬼を欺く⁷ 節分の⁵（「魚合戦」）
門木戸堅く⁷ 閉豆の⁵ 頓而御運の⁷ 開き豆⁵ 虚空⁷
を走る⁷ 空豆や⁵ 鬼を誑く⁷ 節分の⁵（「合戦」）

とある。「魚類扣』は「虚空を走る空豆や」の一節を欠落しているものの、「合戦』同様に七五調で綴られている。一方、「魚合戦』は調子が明確でなく、句中に「⁷」も入り、節が意識されていない。

このように見ると、「魚合戦』よりも「合戦』のほうが本文的に優れている部分があることは明らかだ。確かに「魚合戦』は、寛文八年刊行という事実からすれば成立時期は古いのであるが、しかし寛政七年

（二七九五）の書写奥書をもつ「合戦』のほうが、むしろ古い本文をとどめている可能性が高いということが出来るだろう。ただ、「合戦』ではシテやワキ、ツレといった担当詞章の区別がなされていない。前掲の表で示したように、「魚合戦』と「魚類扣』との関係性は「合戦』に比べて希薄である。「合戦』も親本がそれ以前の段階まで台詞の分担は行われていたのだろうが、最終的に省略されてしまったのではないかと思われる。とはいえ、「魚合戦』にしろ「魚類扣』にしろ、詞章の分担箇所が全く異なっており、その点、理解しかねる。どちらかがある段階で完全に再編成されたかと疑われるが、これは後考を俟ちたい。

さて、以上の考察から、次のように諸本の関係を推測する。すなわち『精進魚類物語』の影響を受けながら「魚合戦』「合戦』「魚類扣』の共通祖本が作られた。そこから、「魚合戦』が『軍舞』収録作品として寛文八年に挿絵を添えて刊行された。一方、写本として流布していた伝本から「小鳥揃」「祝井揃」の二つの歌謡を加えた「魚類扣』が作られた。そしてシテ・ツレ・ワキの表記を除いた散文として「合戦』が寛政七年に

書写されたということである。

アオナを「青菜の三郎」(『合戦』『魚類扣』)とし、ササゲを「大角豆四郎」(『合戦』)「大角豆の三郎」(『魚類扣』)とするのは、普通名詞として記す「魚合戦」に『精進魚類物語』を参照したからではなく、祖本成立段階で『物語』を踏まえていた結果であり、「魚合戦」が普通名詞にしているのは略述した結果ではないかと思われる。ちなみにカレイを「魚合戦」は「かれいのぢやう」とし、『合戦』は「王餘魚」と普通名詞で記す反対の例もある。一方『魚類扣』には「鯛之丞」「生海鼠の次郎はり助」という独自の擬人名が見られ、これは『物語』の「魚臣」尉「鯉鯨次郎」に対応する。これも『魚類扣』が『物語』を参照した結果ではなく、三本の共通祖本の本文に登場する擬人名を改変せずに継承した結果ではないかと推測する。

4 『魚類扣』の文学史的評価

現在確認される異類合戦物は一三〇種近くに及ぶが、その中でも歴史が深く、精進魚類物は一つの系譜を作っている。室町期の『精進魚類物語』を筆頭として、

本稿でも取り上げてきた「うおがせん并しやうじんもの(魚合戦并精進物)」、いわゆる滑稽本『精進魚類問答附唐草繁昌之卷(五穀繁昌記附荒布の前の事)』『魚類青物合戦状』『さかなあを物大合戦』、錦絵「青物魚軍勢大合戦之図」が挙げられる。

これらの作品に共通するのは、料理という枠組が重なっていることである。もちろん、食べられない魚介類も出てくるが、その一方で食品に加工されたものも登場する(豆腐、油揚げなど)。つまり、青物は精進料理、魚類は魚料理という日本の二大食文化を背景としたものだということができよう。

その原点に位置づけられるのが、室町時代に成立した『精進魚類物語』であることは言うまでもない。この物語では魚類方が精進物に戦いを仕掛け、結果、魚類方が敗れるという展開となっている。『魚類青物合戦状』諸本も同じだ。本稿で取り上げた「うおがせん并しやうじんもの」は魚類方が仕掛け、乱戦のまま終わる。類似本文をもつ『魚類精進合戦』は戦闘状態のまま最後は料理になるという、一種のメタ発言でオチを付けている。『魚類扣』は魚類方が精進物に戦いを

仕掛け、御膳廻りの者たちの執り成しで和睦するとう、異類合戦物としては極めて穏当で典型的な結末にしている。『精進魚類問答』は魚類方が戦いを仕掛けようとするも発覚し、大王の執り成しで和睦する。『さかなあをもの大合戦』も同じく魚類方が精進物に戦いを仕掛けるが、鯨の執り成しで和睦する。このように、精進魚類物は、ストーリー展開の大枠に『精進魚類物語』の影響が認められる。

『軍舞』収録の「とりけだ物まひ」は近世前期に伝わった室町期成立の『十二類絵巻』を踏まえて作られたものと考えられる。「むしまひ」は不明だが、元禄に下つて『諸虫太平記』が刊行され、また写本として虫の合戦物が複数成立する。⁽⁸⁾「魚合戦」が『軍舞』刊行以前に流布していた精進魚類物を収録した可能性があることは、前節で述べた。また、「むしまひ」が状況的に純粋なオリジナル作品ではなく、写本として流布していた虫合戦物を改変して成った可能性は捨てきれないと考えられる。「魚合戦」や「むしまひ」にシテ・ワキ・ツレといった詞章の分担が表記されているのに対し、「とりけだ物まひ」にそれが無いのは、収録三編が『軍

舞』のために創作されたものではなく、個別に流布していた三編を取り合わせた結果とは考えられないだろうか。

このように考えると、謡曲の体裁（節付けは行われていないが）で異類合戦物が作られたことは稀有な趣向ではあるが、『軍舞』の孤例とは言えないであろう。異類合戦物の制作にあつて、このような趣向を取り入れようとすることは、一方で手慰みのごとく行われたアマチュアによる新作謡曲が制作されていたことを思えば、謡好きによる遊び心の発露と解することもできるはずである。

補節 「小鳥揃」

『魚類扣』の本文とは関係ないが、本書には「小鳥揃」「祝井揃」二種の歌謡が記載されている。「祝井揃」の類歌は管見に入っていないが、「小鳥揃」は鳥取藩の御船歌に見出すことができる。すなわち「鳥取藩御船歌集」のうち、「御船歌江戸吟」に収録されている「小鳥そろへ」である（日本庶民文化資料集成三・六七六頁）。対照化すると次のように示すことができる。

A

船 扣 やんれ 巢をくいて 子を鶯や 梅か枝の
 ヤシレ 巢をくふて エイ 子を鶯や梅が枝の

船 扣 一華開て 四方の春 木々の梢も 色めきわたる
 一華開ひて 四方の春 木々の梢も色めきわたる

船 扣 ひわや山雀 四十雀 小陵鳥 こま鳥 あをぢ

船 扣 鶯や山雀・四十雀 小雀・駒鳥 青鷗・るり

船 扣 うそ みそさゝい はう白 めうない
 とぞ・みそさゝひ 頬白にうなひ

B

船 扣 かすの小鳥か 花にたわむれ はくきをつたへて
 数の小鳥か花に戯れ 青き木蔭に

船 扣 乙音高音の 調子をもちて し、ふし ぢらぜ
 初音から音のあやうしを取りて し、りふつしり

船 扣 つるくくや して、い
 りんくくり せんするくくや して、いから
 てい

船 扣 かいく ちうく
 からく ちうちうやく

船 扣 からく すりくり ゑりくり はなくり ゑり

船 扣 からく あなつるへりくる あなくるゑりくる

船 扣 ちんか、さいか、すつはるほ しててんく
 つうたかさうたかつはいほふし てい

船 扣 ちりてんく ちりくては しようしようく
 ちりていくちりくや はあしようく

船 扣 きしくとや きりく きつてう
 きりくやきりく きちやふ

扣 きりきつてうくくろ ちりなん
 船 きりきちやうくとうちうなんだか

扣 たらりんくく りんくとも
 船 りんくりり、りんとも

C

扣 轉りたりの 何より以て おもしろひ その又の

船 轉りたるは、何よりもつてへ面白いその 又

扣 エイ
 船 おおへい

扣 春の気色か あそこ爰に 時く鶉かノエイ

船 この春の気色ちや あそこ此処に時く鶉かのゑ

いこくわひ

「小鳥揃」を三パートに分けると、まず鳥の名尽しのAパートはほぼ異同が見られない。しかし鳴き声尽しのBパートは対照化するのがむづかしいほど違いが

ある。結末のCパートも大きな違いはない。御船歌の「又のおふへい」の「のおふへい」は、「小鳥揃」の「のエイ」に対応しているので、唯し言葉の一種だろう。

多くの鳥の鳴き声を取り込む歌謡はそれほど多くないが、延宝四年（一六七六）に刊行された『淋敷座之慰』中の「忍びくどき木やり」には同じ趣向で「ちんくからりのちんからり」とか「つくつてんくちやんくすは、ひやりつろくりつろくくろ」などと、楽器の音を表現しているし、『落葉集』収録の「竹馬踊」では轡と鈴の音を同様に表現している。しかし、「小鳥揃」の類歌は『幕府ふな哥』『鶴崎御船歌』（いずれも『日本庶民文化資料集成三』所収）といった御船歌集に見られ、また『古新御歌枕』（嘉永二年奥書・同書所収）収録の「さい鳥さし」のうち「三日の日」云々もその一つである。

御船歌とは將軍や諸侯の乗船時や新造官船の進水式の時などに歌うもので、民謡とは異なり、一種の式楽として公的性格をもつものである。したがって各藩で作成された歌集に記録された詞章は、藩内では改変されることなく受け継がれていったものと思われる。も

とも謡曲や狂言、木遣り歌など色々なものを取り入れて成ったものである。たとえば右に挙げた「竹馬踊」の轡と鈴の擬音語のくだりは幕府の『御船歌留』所収の「十二月」に取り入れられている。⁽⁹⁾

『鳥取藩御船歌集』は江戸後期の書写になるものがあるが、「小鳥そろへ」がどのような経緯で当藩の御船歌の一つとなったのか、その経緯は分からない。御船歌は『松の葉』や『落葉集』に収録される歌謡との関係があるから、それらと同じ流れを汲むものかもしれない。この歌の冒頭に「一華開いて四方の春」というフレーズがあるが、これは時代が下るものの、肥後琵琶の端歌にも見られる（『日本歌謡集成三六九二頁』）。ともあれ、『幕府ふな哥』や『鶴崎御船歌』収録歌よりも本歌集収録歌が近似することから、今後何らかの手掛かりを与えてくれる資料であろうと期待する。

なお、「祝井揃」も御船歌の中でも祝い歌と分類されるものではないかと思われる。「祝井揃」というタイトルと内容ばかりでなく、「民の籠も賑わひて」という類型表現、「蓬萊山」「鶴」「聖代」「千歳楽」などの祝儀性の高い語句の頻用などが見られるからである。⁽¹⁰⁾

おわりに

本稿では近世前期の精進魚類物を取り上げた。寛文八年に刊行された『軍舞』所収「うおがせん并しやうじんもの」と同一作品として捉えられるものとして、近年、寛政七年の書写になる『魚類精進合戦』（写一冊、塩川和宏氏所蔵）が見出された。一見すると、一七世紀に刊行された前者を踏まえて一八世紀に書写された後者が成立したように思われる。しかし、新たに見出された近世中期頃書写の『魚類扣』（写一冊、伊藤慎吾所蔵）の本文と比較検討したところ、三本の共通祖本を想定し、その上で「魚合戦」「合戦」「魚類扣」が生まれたであろうことを推測した。

精進魚類の合戦の系譜は、一五世紀の『精進魚類物語』以来、近代の地方の語り物文芸にまで続く。そうした中で近世においては版本と写本とが相互に関連し合いながら、一方で語り物や寄席の芸として新たな展開を見せることになる。「魚合戦」や『魚類扣』は、一見すると能狂言との関わりを思わせるものである。たしかに「餅酒合戦」のように里神楽に狂言のレパートリーとして取り入れられた例もあることからする

と、その可能性がないとはいえない。ただ、本作品の場合にはそうではなく、近世の謡曲趣味として、素人による謡作りが行われたが、その一種として評価できるのではないだろうか。歌謡や浄瑠璃風の作品も作られる中、こうした趣向が生まれたものと、現段階では推測しておきたい。この点、今後検討していきたい。

【注】

- (1) 岡本勝『初期上方子供絵本集』（角川書店、一九八二年）に影印・翻刻を収録する。
- (2) 塩川和宏「資料紹介・架蔵『魚類精進合戦』ワークシヨップ」「精進魚類物語」を読む（二〇一七年七月二日・於名古屋大学、伊藤信博氏主宰）における口頭発表及び配布資料。
- (3) 伊藤慎吾『擬人化と異類合戦の文芸史』（三弥井書店、二〇一八年）所収。
- (4) 塩川和宏前掲（2）口頭報告及び配布資料。
- (5) 伊藤慎吾「異類合戦物作品一覧」前掲（3）書所収。
- (6) 伊藤慎吾『室町戦国期の文芸とその展開』（三弥井書店、二〇〇九年）所収。
- (7) 沢井耐三「翻刻と解題『魚類青物合戦状』」『さかなあを物大合戦』森川昭編『近世文学論輯』和泉書院、一九九三年。
- (8) 伊藤慎吾「虫合戦物の展開」『軍記と語り物』五三、二〇一七年三月。
- (9) 浅野建二「解説」『続日本歌謡集成三』東京堂出版、一九六一年。
- (10) 山岡麻衣子「『御船歌』に関する一考察——その出典の問題——」『奈良教育大学国文 研究と教育』二二、一九八九年三月。
- (11) 祝い歌の特徴については森明子「岡山藩「江戸ぎん御船歌」についての一考察」（『岡大國文論稿』二、一九七四年三月）参照。

【翻刻】

魚類扣

魚類元年^{ワキ} 八月十五夜のこと

なるに鯛の將軍かね高とて

^{ワキ} 魚類の大將ましますか^{シテ} 然るに

かね高眷属^{ワキ} ちぬ鯛の次郎

やすかね^{シテ} 同ころ鯛の三郎やす

ときおんまへ近く召されつゝ、

^{ツレ}いかに汝等我既に魚類のつかさ

取とは申せともやゝとも

すれは精進方にへたて

られ無念たぐひはなかりけり

^{シテ}いかにもしてかれらをうち

ほろほし^{ワキ} 境内を掌に

握らんと^{シテ} 思ふはいかにとあり

ければ^{ワキ} 其時兄弟^{ツレ} 生那板の

上にかしこまり尤我等も左様^ニ

そんするなりさあらは国くへ

着到をつけんとして先壱番に

山城の国には桂川の左衛門鮎之丞

淀鯉の太郎ひれふさ近江に

源五郎鮒いへ生海鼠の次郎

はり助鯰の庄司髭なが

法師武者にとつては蛸の入道

だんぎ坊鱷の判官ながすけ

鯨のほうしごみ之助髭くい

そらして御前にこそは詰らるゝ、

^{シテ}扱國くの侍は^{ワキ} 鯨之大助^{シテ} 鱧の

たけ長^{ワキ} 鯨の冠者に鱧の魚

丹後の国の住人鯰のはん官

能登^ニ刺鯖越後に鱧熊野に

鱧の三郎松浦かたには鯛の

一黨ごまめ之助伊勢住人海老の

一属王餘魚の平助鮒之丞其外

大魚小魚さんさめかして戸棚が

城にそ取籠^{シテ} やさしき貝とも

あつまりて^{ワキ} いさやわれらも

みつかんと^{ツレ} 春は吉野の桜

貝夏は和泉の式部貝^{シテ} たまく

待める鮑貝^{ワキ} 明日をしらす

「一オ

「一ウ

「二オ

烏貝シテねさめかちなるいたや貝
ワキうきよをいとふ蟹貝のシテ年は

よりたる姥貝の扱又山伏の

腰につけたる法螺の貝名も

おそろしき鬼貝のおどし立

たる鏡貝シテ船軍には帆立貝

ワキ数にはならぬ蜆貝ワキかいくしくも

参りつ、戸棚か城にそ取籠

ツレはまれの將軍納豆此よし

きくよりもにくき魚類か振

舞かないさ一属めせとある御前

近き一属に崑山の九郎豆

大角豆の三郎年積で十八才

青豆の三郎四郎青旗指で

御前にこそは詰らる、シテ門木戸

堅くとじ豆のワキ頓而御運は

ひらき豆鬼をあさむく節分

の煎豆をはしめとして其外

シテ大豆ワキ中豆シテ小豆ツレざんざめかして

先豆鉄炮をぞ認けるシテ我に

「二ウ

つたわる郎等にワキ先一番には

ツレ獨活の大木近江の国には青菜

の三郎其外豆腐の冠者

麩の源太蒟のふるひ左衛門

近年御勘気蒙りて味噌桶

か城に浪人せし爪やなすひの

功の者腕まくりして御前に

こそは詰らる、シテ時刻うつすな

尤とてワキ戸棚か城に押寄て

ときの聲をそあけにける

城のうちにもシテ急て期したる

ことなれは我おとらしと切て出

シテ爰を最期と戦けるワキされは精進

かたよりもツレ栗毛馬にうち乗

茄子半を着大根の兵午房と

名乗て切て出るシテ又魚類のかた

よりもめくる馬に打乗ワキ鮑の

鎧をふんばりかま鉾を引さけ

蛸の入道かけ出てツレさも尋常に

切散し煮物となつてぞ引

「三オ

にける^{シテ}また精進方^も山城の

旗頭はぢかみの太郎かけいで

^{ワキ}又魚類の方^もより^{ツレ}勢州鱸が

かけ合^両方互に大力寄くまぬ

尤とて押ならへてむんずと

くみすうくいふてさしみと

なつて引に^{シテ}御膳廻の人くくに

塩焼の太郎^{ワキ}朝倉の山舛奈良の

諸白^{ワキ}一ツ所に集りて^{ツレ}聞は魚類の

ものともか精進方へ押寄て大將

きわくくと聞てあり我くかくて

ありなからいさやあつかひ和談に

せん尤とてさし入く終に

和談になりける^{シテ}扱こそ勝手は

しつまりたり^{ワキ}魚類精進一ツに

なり^{シテ}一せん箸を打渡り^{ワキ}六腹指て

そ引たり^{シテ}吸人聞人おしなへて

かんせぬ者こそなかりけり

ちよいとせ

小鳥揃

「三ウ

やんれ巢をくいて子を鶯や梅か枝の

一華開て四方の春木々の梢も色めき

わたるひわや山雀四十雀小陵鳥こま鳥

あをぢるりうそみそさ、いはう白

めうないかすの小鳥か花にたわむれ

はくきをつたへて乙音高音の調子を

もちてし、ふしぢゞぜつるくくやして、い

かいくちうくからくすりくりゑり

くりはなくりゑりくりちんか、さいか、

すつはゐほしててんくちりてんく

ちりくてはしよろしよろくきしく

とやきりくきつてうきりきつてうくく

ろちりなんたらりんくくりんく

とも囀りたりの何より以ておも

しろひその又のエイ春の気色が

あそこ爰に時く鶉かノエイ

ち、くわい

祝井揃

あら有難や此御代に民の籠も

賑わひて扱この御代はさ、ねのみに

「四オ

蓬萊山を莊ること鶴はもとより
千年のよわいたもつ鳥なれはかゝる
聖代聖鳥のいわる君に奉るイヤ
龜は四靈の一ツにて萬代を経るもの
なれは成就いのるしるしなり松は
そのいろ常盤みとりの影に淀川の
みなかみ清き君さまを不老不死に
ましませは千歳樂とのりの船
竹は其かみすくにしてところ／＼の
ふしのまはエイヤヨ／＼華郭公の聲
をき、せつをたかへす人もまた
おりを知るこそめてたけれ扱又
君の御いせひは日々にまさりて
聞へける千秋樂とよろこひて
御代は

(二〇行分空白)

「四ウ

「五オ